

平成14年度第4回日本生物物理学会運営委員会議事録

日時：平成14年7月6日（土）13：00～

場所：東淀川勤労者センター 第5会議室

出席者：柳田会長、児玉、津田両副会長、入佐、伊藤、阿久津、垣谷、上田、後藤、中村、高橋、佐甲、柴田、宇高、喜多村各委員

報告事項：

1 生物物理学研連報告（津田、報1）

第6回生物物理学研究連絡委員会が5月24日に開かれた。以下その報告である。研連等の英語名について、研連の自己評価、見直しについての報告があった。日本学術会議のあり方について、大きく変える改革案が説明された。プエノスアイレスで行われたIUPUBコンGRESについての報告があった。800名参加で前回より増加したが、日本からの参加者半減。また、来年、台北で開催予定の第4回東アジア生物物理が極めて遅れているとの説明があった。科研費審査委員候補者推薦については（議7）で議論。蛋白質3000について、年間110億円の予算が下りたが理研と大学連合で分担する。研究課題を公募し、近日中に採択課題が発表される。

2 日本光生物学協会委員会報告（津田、報2）

第1回アジア光生物学会予想の3倍の規模（339名、14カ国）になり成功裏に終わった。アジア・オセアニア光生物学会の立ち上げのための委員会を2年ごとに行うことが報告された。

3 生物科学学会連合第7回連絡会議報告（柳田、報3）

教科書問題、入試問題等を考える会議。5万円の援助を要望されていることが報告され、承認された。

4 平成14年度年会準備状況（垣谷、報4）

準備は滞りなく進んでいる。会場数が多い上に借料が今年から10倍値上げされたため、全体で150万円程度になる、また、シンポジウムの講演者のうち非会員が32名と多いので旅費援助に工夫がいるとの報告があった。ランチョンセミナーは、最終的に8－10件の予約が取れる見込みであり財政事情がかなり改善される。今年はポスターを作成し、7月中旬に発送予定。展示会場が講演会場と離れているため人が来るよう工夫をする必要があるなどの説明があった。

5 平成15・16年度委員候補者補充選挙結果（佐甲、報5）

4月22日に開票が行われた。一般会員からの推薦8名、運営委員による50名連記の補充選挙による推薦者（特に推薦：40名、2票以上獲得者：79名）の系126名が推薦されたとの報告があった。

6 平成15・16年度委員・平成15年度次期会長選挙結果報告（佐甲、報6）

先の126名の候補により選挙を行い、25名の委員を選出した。また、会長選挙の結果、次期会長に石渡信一氏が選出されたとの報告があった。

7 平成15年度科研費審査委員候補者選挙結果（佐甲、報7）

やり直し選挙の結果、審査員候補者223名が選ばれたとの報告があった。これについては、後の議題7で議論。

8 会計監査報告（柳田、報8）

平成13年度決算報告書を、学会監事である松本元先生と葛西道生先生に見ていただいて、お認めいただいたとの報告があった。

9 出版委員会報告（津田、報9）

オンラインジャーナルの現状について、入佐委員より説明があった。会員等から、オンラインジャーナルをもっと良いものにしてほしいという意見がある。これに対し、（1）オンラインジャーナルの問題点について出版委員会で議論がなされ、現在の会誌「生物物理」の投稿規定がオンラインジャーナルに良いようになっていないのではないかという意見が出されたとの報告があった。（2）会誌そのものの将来の方向性について議論がなされた。電子化によってページ数やカラーページを増やしやすくなるなどの利点があり、この際、英文のジャーナルを入れたらいいのではないかという会長からの意見も出された。以下、それに関する議論である。○（会長）ページ数を増やしてもお金がかからない可能性があるので、現在の「解説」に加えて、レビューがついたオリジナルの英文ジャーナルを、大きな変更なく発行できる可能性がある。○電子化を進めるにあたって、現在の紙のジャーナルをなくすわけにもいけないので、どのような形にしていくかを考える必要がある。今後、出版委員会、運営委員会で意見を交換しながら会誌のあり方を考えていく必要がある。また、電子化した場合に広告はどうなるのか、現在の総説がどれくらい読まれているのかなど検討すべき。

IUPUBのe-journalについて。担当の永山氏より、日本の生物物理学会誌をそのまま英訳したものを載せてほしいとの依頼があり、生物物理誌の中からいいものを推薦し著者の承諾が得られたら、英訳してもらって載せたらどうかということになっていた。ところが、実際はアメリカのBiophysical Journalのような一般のジャーナルになる見通しであることが報告された。これに関し、日本の生物物理学会としてこの雑誌を支持するかどうかについて、出版委員会では全員支持しないとの見解である。理由としては、お金もかかる、立ち上げにかかる費用の半分を日本が負担することになる、そんなにいい雑誌になるとは思えないということであった。むしろ、日本オリジナルの電子ジャーナルを出す努力をした方がいいのではないかという意見も出されている。この件に関し、以下の議論がなされた。○出版委員会の意見について永山氏とは話をしたのか。○費用負担の問題などがあり、研連としては学会に支持してもらいたいと言う意向である。今のところまだ何もしていない。○

いつまでに返事をすればよいのか。○永山氏は研連の委員として、この案でやるというつもりでいる。生物物理学会に費用負担、会員からの費用徴収を行ってほしいということ。○もっとお互いの意見交換をしないと簡単には決められない。○英文ジャーナルを発行して、日本のアクティビティを世界に向けて発信すること自体には反対ではないが、いいジャーナルになるとは思えないというのと、関わる人が犠牲的精神でやらないといけない。もし、日本独自でオンラインジャーナルができるならそちらをオリジナルなジャーナルにする努力した方がよいのではないか。それがうまくいくようになってから広げていくという意味で参加するというほうがいいのではないか。レビューのプロセスが3~4ヶ月もかかって出版まで半年近くもかかるようになってしまうと、投稿する人もいなくなるのではないか。○企画の段階から関係していれば、よいものにできたかもしれないが今のまま費用負担のみをするのはどうかと思う。○Advances in Biophysics を大事にしようということになっているので、その方向もある。○第4回 EABS の準備が全くできていないというような無責任なところにそのまま参加するのはどうか。今主にすすめているオーストラリアの人は積極的だがそれがいつまで続くかはわからない。○これ自体は進んでいくと思う。学会として出資して支援していくかどうか。日本としては独自にやった方がよいのではないか。○特徴がない。地球の半分が空いているから、発行するというのはあまりに特徴がない。エディターがよほど努力しないといけないので、現エディターのあとどうなるかわからない。○結論を出すのではなく学会としての意見を言うというのにとどおけばよいのではないか。○永山さんがやる気で運営委員会に説得にくるというなら別だが、そういう感じでもないで、積極的にやることもないのではないか。○電子化するのを契機に生物物理誌にもオリジナルペーパーを載せることにして1ヶ月でレビューして掲載するとするなど特色を出すのがよいのではないか。○この運営委員会での意見を永山氏に伝え、どうしても支持してほしいのなら、永山氏に運営委員会に来ていただいて説明していただく必要がある。○どのようなメリットがあるのか説明してもらわなければならない。○どのくらい急いで結論を出さなければいけないのかを含めて永山さんに意見を伝える。

現在、出版が検討されているマニュアル本について。既刊のニューバイオフィジックスなどは好評で学会の収入としても良く、生物物理を広めるという意味でもマニュアル本の出版が検討されている。マニュアル本としてどのようなものを作るのか、よくあるお料理本のようなものを作るのか。一度にまとめて出版するのではなく、新しいことがあれば追加していくという方式では共立出版はだめ、学会出版センターは積極的。しかしながら、現在の案はあまりいいのがない。お料理本だけではなく、生物物理の哲学みたいなものをつたえる本も入れないといけないし、どのような形にしたらいいいのかわからない。専門委員や会員に提案を募集したが、いまいち反応がよくなく、いいものができそうな気がしない。この件に関し、以下の議論がなされた。○まず、責任者が全体の趣旨、ストーリーを作ってから、それに乗っ取って各分野の人が作っていかないと、ただ各分野の話を並べただけのものになってしまうので、良いものができるとは思えない。○マニュアル本にすると学問的なことがほとんど書けないので、生化学などのマニュアル本とは異なった特徴を

出す必要がある。タイトルが大きすぎる。基礎的な学問体系についてきちんと書いてあって、それを読めばすべてのことが理解できて、自分で実践できるようなものを作る必要がある。○売れるということと、学問として面白いということがなかなか両立しないので全体のイメージを作りにくいのではないか。生化学などはちいさいことが多いのでマニュアルを読めば自分でもすぐできるが、生物物理の場合は、大きな装置や特殊なものを使うことが多いので、読んだだけでは自分ですぐできるものではない。売れるということの切るのであればつくりやすい。○生物物理の場合は、最先端の技術を使うことが多いので本を読んでそのまま使うということはおそろくないと思う。生物物理としての特徴を出せるものができれば、売れるかどうかはそんなに問題でない。PRが大事。○医者とかも生物物理にはたいへん興味があるので、分野外のひとが読んで、生物物理の手法について理解できて自分で勉強できるものにすれば売れるのでは。○生化学などをやっている人も、現在の生化学的手法には限界を感じており、次の技術は何かということにすごく興味を持っている。そこで、生物物理として出しておけば良いものになると思う。○マニュアル本とするとどうしても自分で見て実験するものと思ってしまう。解説本にすれば、いいものができるのではないか。○各手法の原理から説明してあって、何がわかってこれを知るには何を使えばいいのかわかるような本があればよい。○ハンドブックにすればよいのではないか。○生物物理ハンドブックは、学会とは関係なく今作っているものがある。○ハンドブックと言うよりは、ポストゲノム時代をむかえて、これからは生物物理だという事を言いたい。そんな本を出したい。

10 学術会議会員推薦人の選出 (児玉、報10)

平成15年2月17日までに、第19期学術会議会員候補者の届け出をしなければならぬとの説明があった。会長が中心となって、秋の運営委員会までに候補者を選出する。この件に関し、以下の議論がなされた。○選出方法・過程について情報公開することが必要となる。運営委員会で選出して、総会で公表するというプロセスを踏む。○委員の候補をどう選ぶのか？○選挙となると手続きが煩雑になり、選ぶのに非常に手間がかかるので、会長、委員が推薦して選ぶ。○総会で拒否されたときどうするのか。○報告事項になる。総会で審議する問題ではない。○推薦するように言われているのか。○今後、今の研連委員に対応する2000人が会員になって研連が廃止される。○研連があるのに委員を出せない学会はどうなるのか。事実上、生物物理研連がなくなるということにならないのか。○どうするのかを現会員の郷信広氏とよく相談して、しかるべき対応を取る。

11 会員名簿発行 (中村、報11)

ゲラ校正が来ている。特に変なところはなく8月号と一緒に発送予定との報告があった。

議 題：

1 平成16年度年会開催候補地について (柳田、議1)

平成16年度年会の開催候補地について、これまでの順番からすると北海道ということになるが、平成16年は北海道は有力会員の他学会との関係で無理であること、平成17年に北海道支部として立候補することで合意を得ていることから、他の開催候補地を決定する必要がある。この件に関し、以下の議論がなされた。○機械的に選ぶと、第一候補は京都、第二候補は筑波ということになる。○京都は国際会議がよくあるから免役されている。○京都では、去年国際生物物理学会があったが、それは考慮されるのか。○生物物理とは直接関係ない。○筑波は生物物理関係の人がいま少なく、開催するのは大変。

以上の議論を踏まえ、京都を候補地とすることで承認された。実行委員長は、七田氏を第一候補として、三室氏、藤吉氏を第二候補とする意見がだされたが、○実行委員長は開催母体のほうで決定することになっている。ため、宇高委員が関係者を集めて、京都で実行委員長を決定してもらうということで承認された。

2 平成15年度年会について（美宅、議2）

6月22日に打ち合わせを行った。以下その報告である。生物物理学会としての正式名称は「第41回生物物理学会年会」とし、通称として「神経化学会・生物物理学会合同大会」とする。学会会場の部屋割りなどについては新潟の施設の人が熱心で順調に進んでいる。また、一般講演をポスター形式と口頭発表形式のどちらにするのかという意見がだされ、新潟では、会場に十分なスペースが確保できることなどから、ポスター形式で行うことが確認された。

3 業務委託について（伊藤、議3）

これまで検討されてきた外部機関への学会業務委託について、概算見積もりが出た。この件に関し、以下の議論がなされた。○資料にある業務（会計、受付・庶務）を委託すれば、会長秘書との業務のすみ分けができて、継続的な業務は委託することによってどうか。○業務の忙しさは、そのときの会長によるのではないか。お金が余分に200万円いるのでそこまでは必要があるかどうか。○受付・庶務業務は、年会の時に引継ぎができればよいが、そうでないと引き継いでいくのは難しい。○見積もりの中で、実際に委託することを検討しているものは130万円になる。○引継ぎで途絶えてしまう業務は委託（会計業務など）して、そうでないものは今まで通り行うのが良いのではないか。○受付もフォーマルには事務センターにすると、初めは大変だが引継ぎが難しい仕事なので委託したほうが将来的には良いのではないか。○受付業務を委託することで、会長が替わっても連絡先が変わらないというメリットもある。○来年以降、科研費委員選挙に関して秘書の仕事が大変になる。○予算的には可能である。○会長室と会長秘書という今の体制で行くのか、それとも委託できるところは移した方がいいのかという事をまず決める。○会計業務と受付業務は、引継ぎは容易なので委託する必要があるのではないか。○会計・受付は学会の事務局として骨格となる仕事なので継続して業務委託する、業務を固定化していく方がいいのではないか。○会計など問題が起こったときなど委託していた方がよい○受付業務月4万円というのは高いのではないか。○看板料なのでそれ

くらいは仕方がない。○学会としてのメリットが大きければ委託しても良いのではないか。○秘書が移ることでこれまで大きな問題はなかった。○連絡先もHPなどで常に更新しているのでそれでいいかもしれない。○金額の大小ではなく、学会として事務局をどうするかという問題である。将来計画では、業務を委託する方向に決定している。○電顕学会は規模的には同じくらいで、このような業務を委託していて且つ会長秘書もいる。○実際に運営委員会で審議しなければならないことをまとめるのが一番大変な仕事。決まり切った仕事を委託すれば、秘書が大事な仕事に時間を費やせるので合理的と考えられる。会計業務（730,000円）、受付庶務基本（480,000円）だけでも委託してはどうか。

以上の議論を踏まえ、平成15年1月1日から委託するという意見が出され、承認された。

4 学会委員候補者選出作業について（佐甲、議4）

学会委員の候補者推薦について、現行の規定では、一般会員からの推薦を行い、さらに委員から50名連記で推薦を行うことになっている。しかしながら、毎年、一般会員からの推薦が少なく意味があまりないので、もうすこし一般会員からの推薦を増やすために選挙のやり方を考えた方が良いと考えられる。現行規定では、3名の推薦があればよいので同じ紙に3名推薦人を書く必要はなく、単独での推薦も可能にして、選挙で3票以上獲得すれば当選ということにすればよい。推薦の手間を省くため、会員番号・所属の記入をやめ、氏名のみとし、会誌の封筒同封または葉書で投票できるようにする。などが改善策として提案され、以下の議論がなされた。○無記名ではないので葉書でも良いと考えている。○3票獲得するのは、総票数が多くないと意味がないので難しいのではないか。○電子投票がよいのではないか。蛋白科学会では、科研費委員の選挙電子メールの添付書類をつかって投票をしてうまくいっている。

これらの議論を踏まえた上で、今回の選挙は今の改善案で実施するが、今後、電子投票方法を検討していくことで承認された。

5 男女共同参画についての学協会連絡会への参加について（柳田、議5）

副会長が参加することで承認された。

9 会員名簿の電子ファイル購入について（宇高、議9）

最新の会員情報を会長室が把握している必要があるため、年に1回程度、学会事務センターから会員名簿を購入することに関し、以下の議論がなされた。○1回のダウンロードには、68,000円かかり、年1回学会事務センターから会長室へ名簿の電子ファイルを送付。次期は年会終了後に予定している。毎月のアップデートにはお金がかかりすぎる。○現在新たに登録する人はホームページからの人が多い。Webで登録した情報は学会事務センターに行く。○現在のシステムでは変更分だけをアップデートできない。○入会と入金などを一括でやる会社（プロアクティブ・コンベンション株式会社）もあり、学会事務センターより価格がかなり安い。

○除名される時期を考えて、その直後に更新するのがよい。○毎月必要かどうかは別として、最新の名簿を持っておく必要はある。○68,000円というのはおかしい。○68,000円で生物物理学会のみの名簿しかもらえない。○コンピューターが管理しているものなのでそんなにお金がかかるとは思えない。○プロアクティブ・コンベンション社に委託すれば、選挙やアブストなどの管理もできる。学会事務センターではなく、どこに委託するか再検討する必要があるのではないか。○電子化に向けて予算を取るのはいいか。

以上の議論を踏まえ、次期1回は名簿を購入することにして、継続はしないことで承認された。

6 平成15年度予算案 (伊藤、議6)

平成15年度の予算案についての説明があった。収入：機関・賛助会員費は減らしている。一般会員費横ばいとして計算。雑収入は出版によるものを計上。支出：会誌の質を落として、予算を減らしている。編集費は委員会の旅費など。会誌発送費、年会費は変更なし。名簿作成費は4年後に向けての貯金である。新たに発生した、選挙にかかる追加の経費(5~6万)は、吸収可能である。人件費(秘書給与)については、ここ数年昇給はない。この件につき以下の意見が出された。○人件費はこれまで大学で働いている人と同レベルにするということで時給が決まっていた。○基準がなければならぬので大学の基準をベースにして、経験年数に応じて生物物理学会として上乗せするのはどうか。○学会事務センターのアルバイトの基準をもとに給与金額を確認する。

予備費についての説明があった。研連での科研費の分科細目に関するキーワード等の情報を管理するデータベースを作成するためのアルバイトを雇うお金を出してほしいとの依頼があり、今年度の予算から支出することで承認された。

500万円を特別会計へ

特別会計について。500,000円を会誌電子化のために支出する。○将来的に電子化が進むともう少し金額が増すことになる。○これは予算の原案として検討するというので、年会の運営委員会で決定するというを確認。

以上を踏まえ、平成15年度予算案が承認された。

7 H15科研費審査委員選挙について(津田、議7)

来年度より、生物物理関連の科研費分科細目数が増え、多数の委員を選ばなければならない、免役事項や年齢制限も変わったため、従来の選挙方法では対応しきれないので、急遽選挙のやり直しを行うことが前回の運営委員会で決定され、選挙のやり直しがおこなわれた。選挙方法の変更に伴う混乱はなかったが、1票の得票者からも選ばなければならなかった。生物物理学会関連の12細目に候補の推薦をする。この細目を3つの分野に分けそれぞれのグループで候補者を選んだ。研連側では郷、伏見、津田の3氏で作業を行ったとの報告があった。この件に関し、○今回はどこの学会も混乱しており、早い者勝ち的なことがあったので、そういう決め方はよく

ない。○ほかの学会との関係が難しくなってきた。○今回、生物物理学会の対応は早かった。委員数がかかなり増えたので正しい選挙を行うには母数（投票数）を稼ぐ必要がある。今後選挙のやり方を考える必要がある（議8）。
等の意見が出された。

8 H16年度以降の科研費審査委員の選考方法について（津田、議8）

今回のやり直し選挙での問題点として、150名から投票があったが、まだ少ない。非推薦者の上位50名に旧選挙の48名がそのまま入っていた。氏名だけで分野がなかった。などが指摘され、改良点として

自主的に20名選ぶのは大変なので、ある程度絞られた候補者の名簿があると選びやすい。選挙をしやすくするため候補者の番号等を記入できるようにする。分野を決めてその分野に推薦してもらう。2段審査委員を別に選挙する。などの案が出された。

具体的に、

被推薦人の数：今回、生物物理研連の推薦者は1段審査：107名、2段審査：12名であった。2～3倍の候補者を考えると、最低でも1段：200名、2段：30名程度必要。○キーワードに対応した人を増やしているのか。

分野の分け方：今回、生体生命情報学関連（15）、生物物理関連（46）、ナノ・マイクロ科学（8）の3つに分類したが、生物物理関連が多いため、分野を構造・物性、機能、情報の3つに分けることになった。

候補者の選び方：年会参加者もしくは学会委員＋分野別専門委員にする。

この改善案に関し、以下の議論がなされた。○分野別専門委員を選挙するときに挙げられた名前のリストを使えばやりやすくなるのではないか。○科研費のキーワードと数が違う。○投票している人が違う。○分野ごとにやらないと分野に偏りができる。○違う細目に似たようなキーワードがあるので、生物物理にこないと言うこともある。○3つくらいに分野を分けておいて、あとはこちらで選ぶしかないのではないか。○生物物理もいくつかに分けておいた方がよい。ゆえにトータルで5個か6個の分野に分ける。○多くの人が投票してくれればよいがそうでないと、候補者の数を稼ぐのが厳しい。○参照する名簿がないと20人もの名前を選べない。○候補者の中から選ぶというのは公平性に問題があるので、それ以外の人も選べるようにする。○選挙をしなくても資格を決めれば自動的に2～300名の人が決まるのではないか。○候補者の情報がないので、そういうことができない。○今の名簿に資格判断できる情報があれば可能である。○理研研究員などポストクでも科研費に応募できる人がいる。○これから法人化されて、大学だけでなくなるので、今後変化に対応できるようにしておいた方がいい。○自己申告制にしてはどうか。年会時及び会誌に登録しても良いか調査する。誰でもなれるということにして初めの候補を選ぶ。オンラインでも登録できるようにする。○やりたい人といって募集すると集まるかどうか疑問が残る。○2段審査委員は別にしたほうがよい。

これらの議論を踏まえ、年会およびホームページで自分の分野における候補者を募り、不足する場合は委員で補充する。それでリストを作った上で、分野、1段、

2段に分けて推薦してもらうという案が津田副会長より提案された。2月には最終的な選挙を行い、調整を行う。リストにある人は番号で投票、リストにない人も追加できる。選挙時は、分野ごとにリストを作る。自薦では集まらないことが予想されるため、年会申し込み時に科研費審査委員になる資格があるかどうかと自分の分野を書くようにする。などが提案された。

免役規定：学振の規定と同じにする。他分野なら免役としないことで承認された。

科研費が広がったので申請するようにという通知を一般会員に周知させる文が8月号の談話室に掲載されることが報告された。

科研費審査委員選挙ワークグループとして、佐甲・入佐両委員を中心に児玉・津田両副会長と相談しながら作業することとなった。

10 その他の事項

生物物理学会としての、企画を何か。

以上（書記：喜多村和郎）